東方Project Fanbook
ぱちゅりーのえっちなしんぼん
R-18
for adult only

談笑していたらいつの間にか日が傾いていた。
目の前にいる不健康そうな少女の顔は普段青白いものの、
夕日に照らされて幾分か血色が良いように見える。
頬を赤くしているのは夕日に照らされているからだけなの
だろうか。それにも増して今日は――
「もうこんな時間なのね」
素っ気無さを装い彼女がそう口にした。
目がきょろきょろと落ち着きがない。
膝と膝をすり合わせる仕草が可愛らしい。
つまり、そういうことだ。
華奢な身体を抱き寄せ、情事の始まりを告げる。
「……」
言葉は返ってこなかった。
が、耳に朱が差したのを見て承知する。
こうして逢瀬を重ねるのも果たして何度目だろうか……。

■前書き■

初めましてのかたは初めまして。
何度目かのスケベさんにはこんにちは!
スギコウと申します。
この度は目に留めていただきありがとうございます。

今回は『パチュリーのえっちなえほん』と題しまして
絵本のように話を進めていく形式をとりました。
時間の経過を意識して制作してみたのですが、
ちゃんと表現できてますでしょうか。
ノスタルジックな空気を感じていただけたら幸いです＊´ ヮ`＊

恥ずかしげに服を捲り上げると、その下からは陶器のようになめらかで白い肌が顔を覗かせた。下着は上下黒で妖艶な雰囲気を醸しているが、ひらひらのフリルが付いていていかにも少女らしい。

服を脱ごうとしている彼女に一つ提案をしてみた。

「えっ……服は着たままがいい、ですって？」

眉をひそめながらしばらく考えると、溜め息混じりに

「あなたは本当に変態ね」

そう呟いた。

一度下着姿になった彼女は、再度上着と羽織を身につけ、いつも着ている縦縞の入った服を壁のハンガーに掛けた。

脱いでいる様子を見ているだけでも拷問のような長い焦らしを感じさせられていたというのに、準備が整った今、もう待つことなどできなかった。有無を言わせず、彼女の背後から乳房に手を伸ばす。肌に吸い付くような柔らかでしっとりした感覚が手のひら全体に広がる。

「きゃっ……ぁ……ま、まって！」

「今日はわたしから奉仕させてほしいの」

思いがけない言葉に僕の手は止まった。

「ね、いいでしょう。いつもあなたに甘えてばかりだし、たまにはわたしが気持ちよくさせてあげたいの」

慣れない手つきでチャックを下ろし、ジーンズから一物を取り出す。手をつけるまでもなくそそり立つ男根を目の前にして、彼女はいささか目を丸くした。

「さすが変態さんね。今日のこと想像しておちんちん大きくしちゃってたんだ。わたしが服脱ぐのを見て、わたしのおっぱい触って、おちんちん大きくしちゃったんだ」

強気に責め立てる姿勢を見せているが、僕は見逃さなかった。彼女の肩が小さく震えていることを。亀頭を傷つけないようにおずおずと口に含むと、舌を使ってゆっくりと刺激を与えてゆく。

「んっ……は……あっ……ちゅっ……ふ……う」

あまりにぎこちない動作が愛おしくて僕は彼女の頭に手を置いた。撫でる様に、優しく。

しばらく口内の温かさを堪能した後に一物を抜き去った。
名残惜しそうに、唾液が亀頭と唇の間に橋を架ける。
『んっ……気持ち、よかった？』
微笑んで頷くと、彼女も安心した様子で笑みを返した。
僕はゆっくりとベッドに導くと、彼女を仰向けに押し倒した。
男根は唾液で十分に湿っている。彼女の膣口も準備はできている。
『いっ、あああっ……んっ、くぅ……っ！』
豆を何度か亀頭で撫でたあと、ゆっくりと膣に挿入する。
彼女の膣内は狭く、膣壁を進む行程はまさに、掻き分ける、という表現が当てはまる。
うねりと摩擦と熱で、まるで性器の境目が溶けるような感覚に襲われる。
理性など一瞬で消し飛んだ。

そろそろこの幸福な時間にも終わりを感じていた。
彼女も限界が近いのだろう、咥え込んだ一物を
膣がきゅうきゅうと締め付けてくる。
「はっ、あっ、いっしょ、に……いっしょが……
いいのお……」
少女が腰を左右にねじる度に僕の背中に電流のような
痺れが走る。我慢できないほどの射精感が込み上げて
きて、ついにその一線を越えた。
「も、だめ、い、っちゃ……う……いっ……
あああああああっ！」
激しい締め付けの中、僕は彼女の中にありったけの
精を注ぎ込んだ。

「今日もとんんだ変態さんだったわね。
あんな獣みたいな顔して襲い掛かってくるのだもの。
少し怖かったわ」

彼女は微笑みながらそう言った。
たしかに好きなように振舞った感は否めない。
罪滅ぼしではないが、彼女を抱き寄せると額に
口づけをした。

「んっ……もう、順番が逆でしょ」

彼女の言葉に苦笑いで返すと、少しの間静寂が訪れた。
心地よい疲労感と彼女の香りを近くに感じながら、
お互い見つめ合う。

暗闇の中から顔を出すように、彼女がゆっくりと口を
開いた。

「あなたはいつも、自分勝手」

ふふ、と子悪魔のような笑みをこぼす。
自覚があるだけに言い返せない自分が情けない。

「無口で何を考えてるかよくわからないし、今日
なんて変な要求をしてくるし……でもね、それでも
あなたと一緒にこうしているのは、あなたが行動で
優しさを示してくれるから。撫でてくれたり、
キスをしてくれたり……もちろん怖い時もあるけれど」

一呼吸置いて、彼女が言葉を紡いだ。

「だから、今度は行動じゃなくて、言葉であなたの……優しさが、欲しいの」

真剣な瞳に射抜かれて、僕は息を呑むしかなかった。彼女はいつまでも、僕の答えを待ち続ける様子だ。

でも。

こんなのべつに、よくよく思ってみれば考えるまでもなかったんだ。

なぜなら、僕がいままで彼女に対して抱いていた想いを、そのまま言葉にすれば良いだけなのだから。

そう、僕は――

「愛してるよ」

「パチュリー」

Fin.

東方 Project Fanbook
『ぱちゅりーのえっちなえほん』

■あとがき■
ここまでご覧いただきまして誠にありがとうございます。
ぱっちぇさんによるエッチな絵本、いかがでしたでしょうか。
今回は描いてて本当に楽しかったですー。
逆光おっぱいｽﾃｷ(´゜ω゜)

絵も文章もまだまだ未熟ではございますが精進してまいりますので
またの機会がありましたら何卒ご声援の程を宜しくお願い致します。

■奥付■

原作：上海アリス弦樂団 様

発行日：2011/08/13
発行：しろくろうさ
責任：スギユウ
連絡先：yuu_819_as@hotmail.com
印刷：ねこのしっぽ 様

ブログ：http://pixiv.cc/yuukke8/
pixiv：http://www.pixiv.net/member.php?id=97799

猫兎さんの合同誌『東方獣耳発情祭』に寄稿させていただいた一枚。
かれこれ一年半くらい前に描いたやつです（ヽ´ω`）
絵柄ってずいぶん変るものですねぇ。この頃より今が少しでも良くなっていることを祈るばかりです。

2011.08